The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	視覚表現における韓国の文様の造形意識
Author(s)	金, 福敬
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

視覚表現における韓国の文様の造形意識

金　福敬／京都工芸繊維大学大学院博士後期課程

はじめに

古代から文様は，民族と国家を中心にその生活史とともに，地域，風土，宗教，思想等によって成立している。その文様の造形的特質は文様に限られたものではなく，造形芸術の全般的問題を同時に考えていかなければならない。それは文様の一番基本的な特徴といわれているもので，建築，工芸，絵画等の全ての造形と関わっている非独立的造形である。そしてそれが文化の要素として今日のデザイン全体につながっていると言っても言い過ぎではない。当然韓国の伝統文様にも時代的な生活感情・美的感覚すなわち民族の造形意識をそのまま見ることが可能なのだ。韓国の文様表現における造形的特徴の，根本的なものを追求して，韓国の創造精神を考察する。

1　文化のアイデンティティとしての文様

文様の発生は，人間が美的対象を観察して装飾行動を感じる装飾説，人間が空間に対して感じる恐怖と空虚さからそれを埋めたくなる心理説，呪術的宗教意識における具体的な象徴図形が文様になったという象徴説がある。韓国の伝統文様の場合，その特徴が象徴説に一貫していると考えられる。呪力が与えられた原始文様は時代の変化と共に変形する過程の中で，能動的で直接的な意味は徐々に抜け落ち，間接的で受動的な紋になり，その結果として純粋な文様の機能が残るのだ。韓国の文様には長寿，福，多男，多産等の吉祥的な意味が多く，今日もその文様の嗜好性が特徴として見られる。

文様は用途と表現方法によって変化や単純化を経て，機能的な形象として現れる。その文様の発生と発展過程は，一つの民族と自然の風土・社会環境を通して造形意識と美意識へと形成される。他民族から文様が伝播されたとしてもその民族の感性に反映されたり嗜好性によって新しく様式化されるのだ。日本と韓国の文様の故郷が中国にあるのは間違いないけれど，韓国は宗教と儒教の社会的特徴と風土や自然環境には中国とは違う造形を持っているのだ。日本の造形も中国，韓国とは異なり，機能性と具象性が強く，独自な幾何学模様が存在している。他の国には見られない家紋という特別な日本の文様は注目しなければならない。それは伝統文化と芸術の問題ではなく，今日の視覚デザインにおけるアイデンティティのキーワードとして受け入れられなければならないのである。

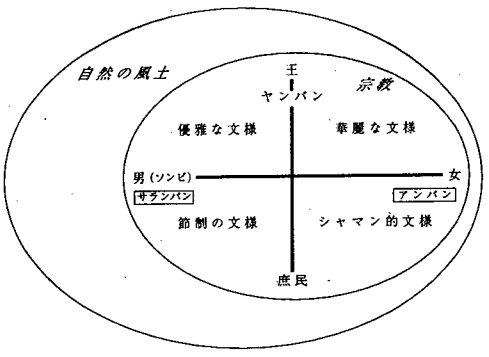
2　韓国の伝統文様と色彩

韓国の伝統文様は社会の変化と共に多様な形を見せた。高麗（平安）の文様は仏教美術の発展と貴族階級の形成によって文様に華麗さが感じられるし，李朝（室町・江戸）の文様は儒教と道教の宗教的発想による吉祥文様が特徴である。李朝の芸術の特徴も民芸的で造形活動全てが信仰的要素に深く関わっている。

韓国の伝統文様において色は重要な視覚メッセージである。文様と色彩の関係においては西洋と東洋は明らかに差異があると思われるが，西洋は文様の色彩より形態が先行していると考えられるし，東洋では色彩が宇宙を構成する重要な要素として表わされてきた。韓国は中国からきた陰陽五行説に沿って社会秩序，冠婚葬祭，人生の節目，年中行事などを規定したので，文様と色は離しては考えられなかったし，現在もそのイメージが視覚デザ

インの心理に存在している。陰陽五行の原色で縞模様のセクトンが誕生したが，始めは赤，青，黄色の三色だったものが白と黒のかわりにピンクと緑が加わりより鮮やかになった。セクトンは色彩を形の一つの要素として作られたし，宇宙の根源的な力を象徴する色彩を全て集めたので呪術的役割を持っていた。その意味合いが示すようにセクトンは李朝時代には女流階級の女性の衣装，結婚の衣服，子供の袖など限られたものに，模様と色彩が加えられた。

3　韓国の社会構造と文様の特徴



韓国の文様の特徴を探るには李朝の社会構造を理解しなければならない。李朝はヤンバンと庶民の二つの階級に分かれるが，ヤンバンの男性をソンビと呼び，彼らによって李朝は徹底的な儒教社会になった。物欲と権力をもたず，学問を尊ぶソンビ精神が当時の社会全般の思潮になり，その思想が社会の基準になった。

儒教の思想の一つの「男女七つ不同説」によって男女が独立した生活空間を持つようになり，そこから李朝の男女文化が誕生した。ヤンバンの男性が居るサランパンと，女性が居るアンパンの空間の造形を分析すると，李朝から今日まで繋がっている韓国の造形意識の特徴が読み取れる。儒教の白は禁欲のシンボルとして当時人々に好まれ，その美意識から李朝の文様と造形意識が感じられる。特に，ソンビは無装飾を最高の美の境地だと考え，社会全体がその意識を志向した。結果李朝の芸術品にと庶民の生活品に過多な装飾と文様が節制された。サランパンには限られた文様だけであるが，女性の空間には自由な色彩と文様が許されたので，アンパンには紋の華麗さと呪術的意味付けが強く加わった。その文様のほとんどは，人に見せるものというより家族の幸せを願うモチーフで刺繍と民画によってあらわされており，その素朴な発想には韓国の民芸的な美しさがあり，男女文化の二重性が他の国と違う文様の世界を作り出した。

造形の情緒には社会背景以外自然環境が深く関わっており，そのキーワードが風土で，風土には文化的意味が含まれている。韓国の風土からは韓国の文様の造形的表現のプロセスが説明できる。風土の基本は地形であり，韓国の老年期の地形には曲線のうねりが浮かび上がっている。韓国は曲線をもっている木材と土，石が建築の様式になってから，その空間にある家具，工芸品，文様が有機的関係を持つようになった。韓国の文様の特徴は曲線のタッチでその線を大胆に省略することによって抽象美が見られるし，余計な装飾を避けようとしたのは宗教の思想と風土からきた造形の心理なのである。

おわりに

韓国の伝統文様は装飾と色が限られた条件にあっても文様が許容された場には豊かな表現を見ることができる。この発展の背景には宗教の思想による韓国の社会構造があった。儒教の思想が男女文化の横軸になり，ヤンバンと庶民の社会階級が縦軸になってからそれぞれの文様のスタイルができたのだ。だから韓国の文様は一面の特徴だけ注目するならば，偏見を招く危険性がある。韓国の風土や社会セクションを理解すれば，韓国の文様だけでなく造形意識の真相も現れてくるのである。